椿說弓張月 五編 巻

へ 13
2945
27

へ 2945
27

曲亭先生之略傳　陳金谷門人謹識

曲亭馬琴姓瀧澤諱解字殖之號馬琴有家小說所編況室呼著作堂亦有數号曰蠧齋曰信天曰蓑笠曰魁雷曰曲亭等其本邦牧學士島先生之著作雖有自種最灼然八犬傳俠客傳美少年錄化浦住用姫石魂錄子張月後宮鴻物語朝夷名塚巡記彦三霊驗記八犬奇談若枝鳩等其外三勝半七等之通行物語不有假牧翠外編牧翠有數種又隨筆有燕石雜誌玄同放言拓花窓錄等有牧書嗚呼壯哉偉哉苟先生カリセハ貸本屋の忽然聰明天縱宜哉田中先生ノ藏三先生ノ像ヲ飾リ朝夕所酒ヲ供ニテ主人姓同再拜ス

日上
松
昭和九年七月九日 購求

鎮西八郎為朝外傳　椿説弓張月　残編　巻之三

東都　曲亭主人編次

第六十一回

壁を穿て三兄源按司と刺人ことを疑心坐ふ暗鬼を生ず。物ふるべべることあり。拓けいかるべきことありされば松壽ハ忘れども。為朝親子ふ疑れ。人を言語もなれ妻ふ似ふる千歳ふ伴まて。只假初ふ締びゝ結。えはしも仇よりけり。さくろ頻ふ焦燥く。婦が冷くば一刀ふ砕くも殺して右ゞ為るものを目の為ふ志ふとゞに後の患を除んとて。門扉を些し引あけて彼鶏丸の宝劍の璋放べて身を潛まし候とハ為るや。為ふ雲ふ吐れて月かさゝまくく。小夜深ゆけばいとゞしく。軒端ふ来鳴く梟の声ゝ高く深山

邊は寂寞として物もなし。浩処は外面は滅裏こゝと物の音して門の樹色推破る。こゝさへ潜り入るものあり。松壽は遥に透し視るに、ハ癖者よとひとり点頭て息もせで窺ひ居たるに、こハ如何に癖者ハ水を潜り入りて頭を鶴草に生る蛇のごとく水に離るゝ亀のごとく。左手を延ばし右手を延ばし。高く這ひ寄り竹縁にまをけて只彼春の筍の生出る如く身を伸し内に入んとするところを。松壽ハ閃りと走り出て。ふり揚る刃の光りと共に首をうち落し頭髪を纏さゝ入る。月影はほゝ〳〵これハ是則別人なるべし。この山乃麓なる猟夫辰平といふものなり。さて千歳に分かゝられて大里按司を害せんとなるべし。密に来つるとおぼし。這奴憎むべしと罵りて。蹴かへと死骸の懐より。滾〳〵と輾び出るを何なるふんとてまふとれば人を

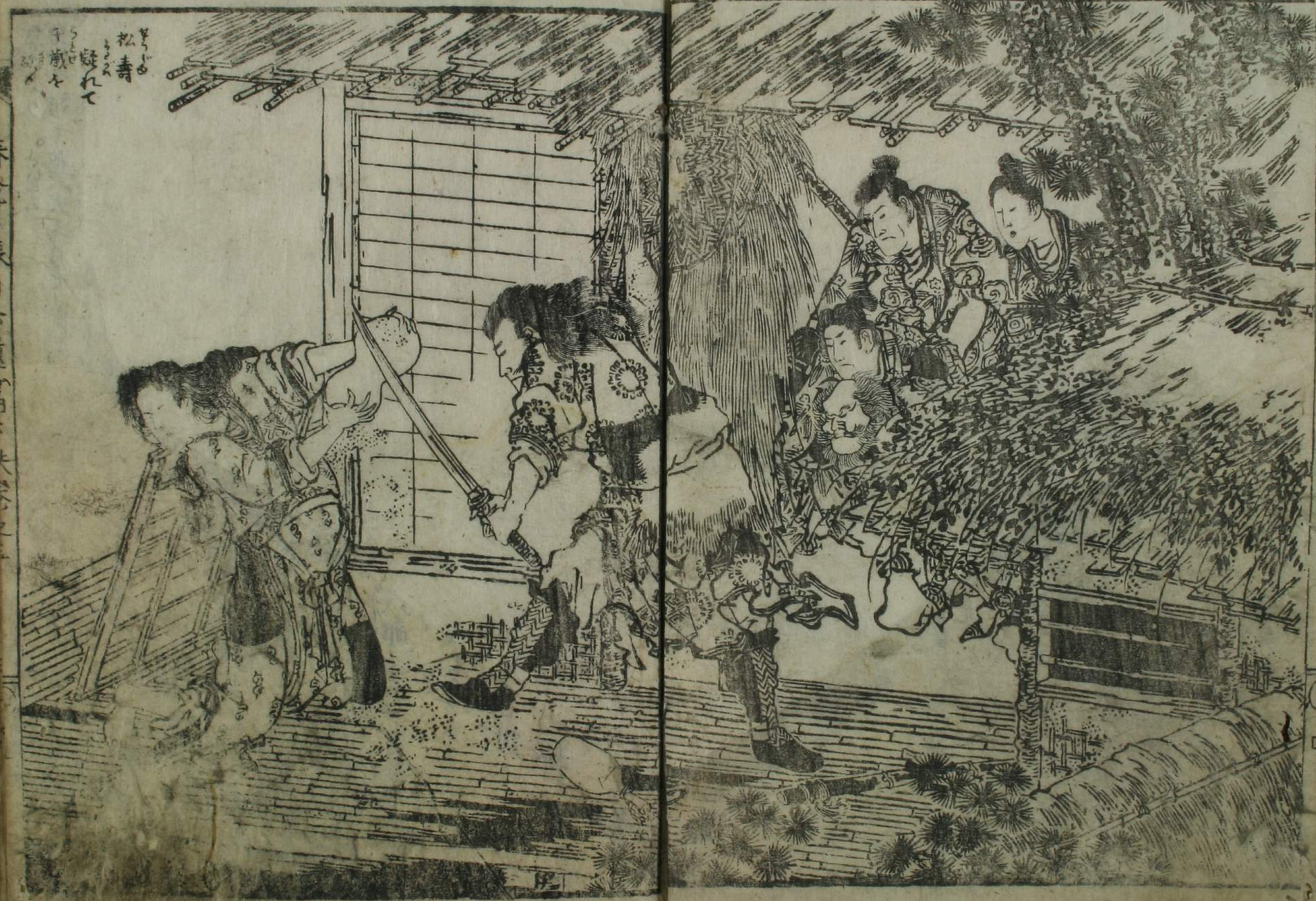
呼子の笛なりされば。こゝ支度あれ。鄭王女が紀平治とおもて。この処へ来まふ折山蔭なる樹下に野臥ホが團坐して為朝を捕んと。高謀をつる氏竊聞せしと。宮ハせしこのものなるべ。かゝれば千歳が野心あること。いよ〳〵確も量らる。と肚裏に思ひ引提刀背後にかくして。件の笛を吹くほどに暗号と潜るといふ声の。外面より洩れ来えて。鞍計の悪棍玖馬蝮宗。亦彼邑の透より。りろこもに潜り入る。縁頰に立ちける松壽と辰平とやゝ〳〵ぐんとなる〳〵と歩みよりて。やよ為朝ハ何処に臥るる。容子ハいかゝとさし覗く蝮宗が細項を腕うけて一撃に。ぐゝとさんど切おとせば。これハとびりと身を翻して慌忙に逃んとする。玖馬が背を乾竹割撲地と倒る〳〵死骸となる。鮮血流れて附るふね紅葉を庭に深なせり。松壽ハ既に二人の悪棍を

剿ノ しつ。千年千歳ぐ久りも来よ。りこの賊婦を撃漏さば。ろぐ赤心
を彼君ゑ。ちぶしなるふるほ足ぶ。とそくばゑ女ちふぐ。裳ふくく細く
拔ふ刃を鞘ゑ納る折くふ。外面ゑ足音して。戸折戸を推開れ。ろぐ丈夫
久ゆりもしう。といひつ入ゑ千歳ゑ。松寿い花もくろぐり。跳り出ん
とちくりしが。走ぶしていひぐひ。ゑしくまえちくはして。とそひゑして些
退れ。物の蔭へと身を潜まして。こくろの寐刃あらせ砥ゑかくる恨のあり
とい ちふね。千歳い名のこ今霄今。細き孤燈の光よりも。先へぞ滅る露
の身に何ゑひもく翌のゑ。菓の帯して引提くれこ弁入の大甕。旅
客をさ人宿せふ。夫婦が外まいりは草。かき集てもまぐ足ふね。旦開
の炊の粟を買て。ろぐも夜を徐しう。みるちゃ睡りあひゑめ。と
ひとりぐちつくく披る。板戸を走る刃の電。あるや。と叫びて花退けば。

疊うけて打太刀の。下を潜くて受とる。甕の中の精粟身ゑ降かる
邪慳の刃い物。ゑや物ひまふくん。悔あくぶ勸解もせえ假初ゑぐら
小ゑ年。夫婦迭ふりのあふがゑて。顔赧せしゑ女れゑ何を恨こて
かくまぐゑ強顔人となりゑ。といりせもあくど眼を瞪ぶし。牙の邪こ
ころふ向へ甲夜ゑ汝がくくひ為させ。辰平玖馬頻宗ゑ首こ既ゑ
軀をこゑれて。彼処ゑ刎せるとゑほこんぐや。といれまき高く罵りく。亦
姫ゆうくれを受ゑぐこ甕も遂ふ砕刻れ。徐ゑ難く逃まぐふ裳踏れ
て轉輾。弗とより離ゑく。髻結ゑる黒髪。忽地乱を焼。白刃の下。彼此こ
臥ふ避て起あぐ。右ゑの肩より乳の下ゑけて。砕れて撞と仆れけ
車のくうを闘窺くれ。為朝い紀子治ゑ。延屏風をひくふかくく。王女
舜天丸りくくもに。端近ゑ出て松寿ゑ對ひ。言と行とけゑたぐらね

東風平按司の誠忠ハ賞さぐく疑ふべうらぶ。既ヲ間諜の癖者と。
悉く砕て六段となし。恩愛を棄て癡情ヲ引まぶ。又この千歳の
とあらぶれ。身煉の太刀さぐ。勇あり義あり。志新ふまれけくと。彼所
より闕窺とるヲ燈火の光ハ明なれど。千歳が姿を障子へうつぶしこハ
推量ヲたぐつと。亦曚雲ぐ幻術ヲ。この婦を作り出し。足下の色
を蕩そ為朝を誅せんと。幽くも謀るものとちぼし。死骸と展撿
ふと宮ふにてうを切て。松壽ハ構の指燭つ。ゆりうさもに是
をこれハ誅まれ跡ヲ。ふれ骸ハ只一本の空卒都婆となりて。中よつ
答ヲ切口の太刀跟えゆる羅漢枕。こうくいうヲ。とさ引て。主従
幽くび怪こうり。松壽ハ空卒都婆とうちかしうちくこえて眉を頻め。
これハ見いねる比。生捕ぐ蓋提の為。某竊ヲ越まゐる。石橋ヲ建一

卒都婆。人ふちうれぐと見ふ故ヲ。その姓名を字さ孫ど。五輪の上ヲ
節あれハ。ふも忘れべうらあぶ。原来千歳ハ生ハ捕ぐ。霊あてそあふん
ぐうふ。梅魂の幻ヲ。生て山踏ヲ。伶俐る夫ヲ斉眉りのあふば按司
王女を誅せんとて。悪根ホんぐかうふ。これも又曚雲ぐ。幻術のあと
而歌。それうあうぬる。不審と。幽くび惑ふ亡妻の。ちぼしの卒都婆突
立て。右ヲ方ヲ。ふれど。うは疑ひハ散ゆぶ。王女ハちぐく嘆息ー。
姑場の山蔭越来の石橋。母廉夫人と。笠鶴ぐ。誅れー跡として。途さり
あくどう立ー卒都婆をうるぐふも。外の作善とむりほえを。悲ーかりしぐ
うへふて。ふれ人の為陶按司ぐ。建ー卒都婆の物ぐりにおりひあひて
うぐふ。ハ。それ。ありけりと。嘆れども。かふる不思議のあぐ。ふへ。ちらぐそ
人を疑ひ。罪いと。体ー。と宣ふ折うふ五七人の猶夫ホ。二人の荒男に


まつじゅ
松寿
疑れて
千歳を

索を破て。篝火ありてらしつ。松寿が門辺に引揚来て。高声に募り
けり。上座に在ものハ八郎挼司と王女にてぞましませける。僕の樵夫
ハ。甲橋。乙柚。丙烈。丁炎春なんど呼ものなりける。そのあはひに東風
平の陶松寿なりしハ。さるほどに。年来蒙雲が暴虐に苦しめられて。
ちかく志るべの活業も得せず。八郎王女の仁徳を慕しく思ひまゐりて。窮厄に
おん所在を索ん為に。夥計の樵夫樵夫なれど人とひあはせしけるに
甲夜にきこゆる偏目婦が遽しく走り来て。八郎挼司を恙なく
夫婦父子なりとも。わが家に宿りまして。今の置むべうもあらバ。らが
良人へあなにし世を潜んには樵夫のされ實を八郎挼司と謀りて。大臣
利勇を誅戮せし東風平の挼司松寿なり汝達いかで逆ひ去て順ふ
さらばかゝらバ。ま疾く馬りで志を述宿直して非常に備へ。名とも

揚家をも起さんと思ふ只この時にこそといふに欲しく。俄頃に夥計の者
ども呼集會て。縁由を告しらするに。辰平。玖馬。頓宗。未小八。申大七
といふ五人の樵夫従ひけり。何処へかゆきたりけん。緯半はしてかへらずなりね。
彼ハ告首をしてやといと〻ちかとうさぎに馳しあることしは後にしく。
すんば者奴等が往方を索るに。桧皮のほとりにて。その未小八と申大七が
なきくらになりしをあとひれ。されバとて矢庭に縛めける辰平ら五人の
往方いかにと責問ども。若痛に堪ず。吾們五人謀しあはし
て。辰平。頓宗。玖馬ら窃に為朝を刺殺して。王女を生捕ん為に旅
宿へ赴き又おのれらが五人の緯の趨は越来の土官に訴へよとて
この処まで走り来るに。忽地後方より千歳が声しく海に仏をあらしく
うちて。仁義の良将を寇せんとならバ。望をもまうけて立地に死ぬる死させ

すまじきぞ。辰平玖馬。頓宗。やつぐ良人を殺されうとなげかせられて。えくれが。足俄頃も離麻呂て。一歩も運び動かず。これも
もあらぬ丸杖をんどを。押立る女うしし。今さらぶらくば。驚よ惑ひて。
三徳兼ねこれ大将が亡ひなんと謀りうれ。天罰かくも速なる欲
と吼面ふせて賠結るもうしく。直ち辰平ホを追ひ留んとく。脚て
摧ふ手ーたること。叮嚀ま濃なり。こゝ一帯ま居まぐれうるる郎主従
これを見て。面が。あひして嘆息。さてこそ千歳ハ曚雲が。幻術あハあら
ざりけり。こゝ芸術ぐ負魂の。窣都婆ホ憑ぐ良人ま斉眉ル負郎
忠義を盡さと。生る時ふもいやまさせ。神ぐ。ぬ弟ハ疑ふて夫ま
逼りて撃せ。情ま。とて恨こけん。死ての後よぬれ衣を被る側を
日本ぬ傳稀なる負烈の女の鑑とあるべきに。あるべうらくの幸なき。

過世いるれ報ひ欲といひあハさ孫どいとど。誠ハ言語よあくハれて。
ホせんさべもなかりるる。且て為朝を猶夫ホ。ちうぐ。ぐこ。汝ホ
世ーたうせ。千歳を撃せざり。彼ハ黄泉の客なりとも。その誠心
を見ることかひる。賊婦悪婆と罵られ良人の刃にかゝをぬれ今殺の
こうう推量れがこるる為朝ぐ悔なり。箇様ぐこのるありとて辰平玖馬
頓宗ぐ潜び入りて。松壽ホ撃れ。又彼千歳ハ松壽ぐ前妻真鶴
ぐ負魂なるる。一五一十て説ちぐ。切られ窣都婆ぐ見せるるハ。猶夫
ホを毅然と或ハ怪こ或ハ悼こて。感涙ゆふ拭ひあくぞ。そぐ中ぐ甲橋
ハ涙うちゃみて班を出。真鶴命婦ハこうう雄しく。曩ホ王女の中城
ぐ。ちちまぐ。越来の石橋ホ。悪少年ホ防ぐ戦ひ討死ぐ
鯉忠苦節ハ世間ホかくれなく。その比の風声ホ標致尋常ま勝ぐ。

いま及べど偏目なりしハ事も何くも死しての後に魂鬼の幻にあらはれて。
良人の憂苦を慰むるこれをいふ世にハ稀なるに。かゝるその名で千歳
と称して偏目になりしハこゝろ深きを賢ぐちて謂れハ舜天丸窣都婆
に指して往昔もかゝる例あり。五體に象れ五輪の塔婆に木の節一ッある
故に偏目とハなりぬるならんと諭しぬ人ハ陶松壽もこぼれし栗を掻ば
て彼耶鄲の五十年ひとり見られたる鶴が昔餌をこれに食残さを鶴の
齢を象りて千歳と名告れども命短くなれ魂の仮に姿をあらはしぬ。
添ひ外にあらく。それを松壽と志りながら。なぞ変わるも告ざりし名
のこゝハ朽ね板庇おなじ宿りにありながら舊の妻子と志らざれで賊婦
の為に欺れぬるぞ相當に隨る欽と只管怨とて衝けしその宝剣の
威徳におそれて志ばしも影をとゞめあへぞ不立文字の没字碑。殊れ

像見ハ正木の窣都婆外なる絶て無一物。四大破れて本来空にほ
ゆるとも志らじ生け。さん身が没後の識になく。それも面をおとせしと在
るなごく物いひかけて注ね歎きなど云ひふれ舜天丸まさしく嗟歎して。
年少けれバ智も浅く。人をみれてとよくも察せん。かゝる夫婦を
疑ひしハ親をおもふの故にハあれど。額に汗して羞るに堪より後悔
そとふちかごとし。と人を責まるかとこさふ。紀平治ハ瞼をおさへて。一人
田土と寫したる牌を造して拾ひ甘しハ今霄の宿りを由縁の家と。
暁らべきならんに。あしく判じて忠臣烈女を苦しめしハ雑君のあへ
蝦にいるぞ。こハ是老の僻目ざ。と賠話つかくれね招亀月夜鳥も
梢を去れて良れ無常を告るや。と王女を空ふうち仰ぎて。おらい
姑くむまし。かさみとさふとつけて痛しむ。鶴が身の形なさき生ぐ

むかしの山雞の尾上隔て七年あまり。良人とひとつ臥房に入こゝ。死して今亦妹夫の契り結ぶ仏の露もとゝるゝ草の原名殘もいとゞをしかゝめ。魂魄いまゞこの土と去ゝぶ。ふゝび姿をあらはして夫とそひも遂よりしとかれに說ふぞ。松寿を面目ゆ上あり。忽地形をあらゝめて真語がるゆいとゞ。悼をまふをもそのかひ。既ふその誠心を。ちゝ〜ゆれてかくまでゆいとゝ〜ちおとるゆき魂もさぞ本意なゝ光。若も物いふの淚ありこゝいあまりゆ端ちゞと王女を練めて恭〜く。鵜丸の室劔を。為朝ゆ返〜まねゝきれば。為朝これを受とりて。劔の德ハ身ゆ衛りねゝの意ゆ隨ふりのゆり。さゝよりて。智仁勇あれりのハ雙ゝと伐り。狐疑をるりのハ身方ゆ伐る。これゆ夫婦を貴せん為。又今霄のゆとりて。後の誠とせんゆ。

鵜丸を更ゝ。生の落の太刀と吞ゝべ〜。現ゆやゝゝ日の本の。血著の窣都婆ハ本ゝりゆれど。老婆が愚直より地妖を脫れ。今生の殺が血著の窣都婆そゝゝ。疑念より負女ゆ逐かの愚ゆ及びがゝとも。只この窣都婆を亡骸ゆ。代て山路ふ塵ゝゝ。これもゝゝ送らんとて竹緣ゝ立出て。甲橋乙柚ゆうち對ひ。汝ゆゝゝ。ゝゝあゝゆ。ゝゝより直ゆ倶ゝゝ。ゝゝ賞ゝ。ゝゝ郡便ゝゝれ亦雞ゆ揚れと。ゝゝ。ゝゝ。又未小八申大七ハ。生の殺が追鷹ふ命助けて。ゝゝ。ゝゝ。謀れがとて。為朝を撃ゝゝ。不義の富貴が願ゝゝ。ゝゝ告ゝゝ。賊軍の鄕導して。ゝゝゝゝゝゝと仰ゝゝ。拔ゝ縛の索切去ゝゝ。二人の惡根首を叩て。數回拜伏。吾仏既ゝ

自の非をあれば。何地へか罷るべき。羽生の山路の郷導して。ゐれよと勸緯
あけり。かくて為朝いそがしまへば。王女舞天丸のろまを宿りと出て野辺
送り。低し罪も極楽のうちなるべし。そかとうふ。窣都婆引捉る
紀平治が。先へハ立ど逆縁の松壽ハ袖の雪拂ひ。夜ハまぐ添て大將の
恩恵ろくで今更ハ冥加ありがれ亡妻の羊孫く後の葬ハ棺よあらぬ
松原茶毘の煙ハ峯の雲舊を石傷の水葬と。今あらためて墳墓や。
玉を瘞めも越来山古跡を遺を夫婦墳の由縁ハ塚の卷ハ入えり。

第六十二回

城山中ハ毛鶴寛家と張ハ
天孫廟ハ阿公首級と贄とハ

屏風ハ敗ろうとくども。骨なは存ぞ。忠臣蓑ーとくども。志殺らど。
さても鶴亀同胞ハ長川の敗軍ハ辛ぞ圍ゑ殺脱大將軍の往方

を索ぬるハ為朝ハ嶋袋ハて猛火よ燒れ。大里の城さ落されて王女も
くやなれるひねと。ゆえーろべ。送恨の涙禁めあくぞ。せめて顕身の息ろ
内ハ阿公ろ所在を索ねて。母新垣ぞ寛を雪め。首里の舊都へ潛ゆて。
蹶雲ぞ出れを窺ひ仇を撃ろ。君父の恩ハ答んとて。遂ハ
住楚嶽ハ身ゑ躲ー。掬箭を負ひ。半弓と挾ぇ。僅よ禽獸ゑ射て露
命と繋ぐ。とくをれ行ハ。その年も暮れろ。かくて二月の中旬よ。
かぐ。有一日ぞ。いろ。つぐ同胞不思議ハも存命て。弥山の奥ハ
隠れをれハ。敵ハ索れどといふとくども。亦身方の兵ハ環會ろ。
もし千餘騎の軍兵ぞ一騎も殊ーぐ。雙れるハもあぐ。我ハ等ーく
存命て時をまつりのあるぐやハ。浮世ハ遠く潛ぶ。月い首里の風ぞ
ゃくぐぶも。たろれなきといふせん。おりろよ。真和志綱切の名なり中山舊を屬を

城山は一名を灵嶽と唱ふ。峯高くして。樹林深く。人跡稀なれど。首里へ遠くふぶ。これ究竟の隠宅なり。おん弟は東の山路を孫へて。そなへ彼所へ越えぬ。また。これは又西のかた。読谷山より浦曲を繞りて。件の山中あり。再會せん。かなふべしも途より西へとて。街道を走りまふる間切毎に新関あり。草にかくれ。将場の雉子も。声ならねどぞ人ふ志ふれ路ふるれ踏ふるけ入ぶ。日数孫るとも危うぶ。何るも忠孝ふ志ひ久して堪忍びまくしと。説諭せば。亀はこの紙ふ志ざひて。作うもまりいひね。只ムりとなれは。西へその路ちしとしども。浦曲を人の繋ふ所。憚るうとも妻うはべ。おみじくふりうともに東の山路へ越えまひ。紙。というふ。誘ふ頭ふうち揉て。見ひとう路を走りて。敵ふ志うとあふぶ。孰うこれを脱果べ。かくては思慮の浅はふ似うり。

西のうとは海辺なれども。読谷。北谷。泊。七風山。あんど。浦曲ふ添ふ。山あり。つぶるふは。ムりとなれ。くくうちたまとといふふ。亀を推辞ふ。再會ふ契りつ。魑くく袂をうちけり。抑佳楚嶽と。ゆえふ。名護嶽の南ふあうて。山北首ふ属しなり。ちうより城山へを廻ふ。三十六町を一里と定めて。二十里ふあまるべ。元来人ふ志ふ。山路のこはくほどに。ひの外ふ日をふりて。亀は二月廿日の黄昏ふ。城山の巓ふ。つけ。ぎりつ。この日はいくく山路ふ疲労れ。日もすでに向暮とぞれば。兄を蒙るふはしまふ。いづれの樹蔭を宿とせんとく。前面の谷へ些ムぐりて。とうれば。ふりくれば鹿荒屋ありうり。こは夏の比ふが。照射ぞ為ふこそ穂屋。昔月うけてもくるふ。光ぐ宿ぶうと。ひとり歌び。延戸揚さく内ふ閨ア。宗を枕ふ。外うる。案下某生ふ

つる鶴を亦西の捷径求めなれば。亀あり二日先ごちて。城山へ攀登りぬ。幽谷羊腸として。新樹ゐ暗く。何処を路とゝ定め難し。彼此を徘徊きく。一両日をゐ過せども。いまだ亀あり逢ざりゝ。されば此の山を山氣えあらえて。靄ぬゝく。飛ぶ鳥ざゐも稀なれば。猟箭ハあれど獲なゝ。花を

あれども果をゝえず。いとゝう餓られば。弓杖ゐ携りつゝ。遥ゐ谷蔭を直下せば。谷川ゑ後ゐ一あれ。一汙の草舎あり。かゝる源山ゐ住む人も。あれば

あるゐやと訪く。獲て藤蔓にま縛着れ。巌頭ゐ足を辿うけ。辛じて

その処へたどり着。門辺ゐ立て宿りを乞ふゐ草舎の内より。年才を

八でりゐ男の童大人しゐゐ来り出て。路をはゝぐと見ていゝ。

ゐん身いゐ出してゐ来りひられ。ゐゝゐ元来浮世ゐ遠く。人倫の住宅ゐ

あらぬ。ゐ一ちゝどして宿しゐゐ。命立地ゐとるべし。あらじハ嚮ゐ

いまゝ逃ゝざるぞ幸なれ。ゐやく走り去ゐ人ゐ。いそゞせゐ鶴

あゝゝ大ゐ怪ゐ。つゝゝと尋思ゐ。現ゐかゝる山家ゐ。藤蘭ゐる男

の童の。ひゝり留るしてあるべゐも。なゝゝゝ。これハ正しく山の神ゐ役

ゑ。二郎五郎なんどゐふりのゐゝゝん。ゐゐりとも壮士ゐ。命ゐゝゝゐゝと

笑ちぢして。不ゑゐゐ逃も走りなば。ゐゐゐ何ゐゐゐべき。強て宿り

をゐゝゐゐ。ゐゐひしゐゐ。ゐゝゝゐ吾身を首れば。父君の讐を外はして危ゐゐ

近つゐゐ不孝なり。不忠なり。ゐゐひゐゐゐて童子ゐ對ひ。ゐの為ゐゐ

ぞゐゝゝ留られ。ゐゐば憑ゐ。樹下ゐ両漏る仏地こそゐれ。某漫ゐ此山へ

迷ひ入りて。二日ゐまり。ゐ過せしゐば。餓疲れて速ゐ走ゐ。べゐ氣

力ゐ。ゐゐ。ゐゐゐゐゐゐゐゐ。ゐゐゐ餓を凌ぐゐ恵を忘るべゐゐ。

と乞れゝゝ童子ハうち点ゐ。ゐゐて走り入りて双の麦ゐ椎子を編ゐ

だくりて生つ。この処あり五穀なし。これまいるべうりやといひてさ
生せば踏ハ腰なる餉袋ふ忙しく受おきて。その恵をよろこび笑え。
舊の尾上へ十町あまり。立かりつ亦ふ毋う。今の童子が面新へ
何となく氣卓くええう。その年才を推量れハ阿公が奪ひ去る。
王子と同庚なるべし。ちうぶ彼草舎ハ阿公が隠宅なるべや。ろひ
あいをれるの遅くて。他よりとそ鉞まーられぬ。ぬるくび彼処ふ赴て。
あひじがゆるを張ゑぞし。ちうまりく。とひとり烏阪亦谷蔭へと引入せ
ば。日をもや暮く月いまぐ出ぐ忽地ふ路ふ迷ひて。いけどもく草舎を
えんぐ。こころまもく焦燥く。左欧右紅と同へふも人跡絶る涼山辺
を。彼首へ走り此首へ走れば。砂ふ跌て荊棘ふ足を傷られて。身さへ神も
労れーるぐ且く株ふ尻をうけて玉兎の走ると俟ふどふ玄中の月ゆやく

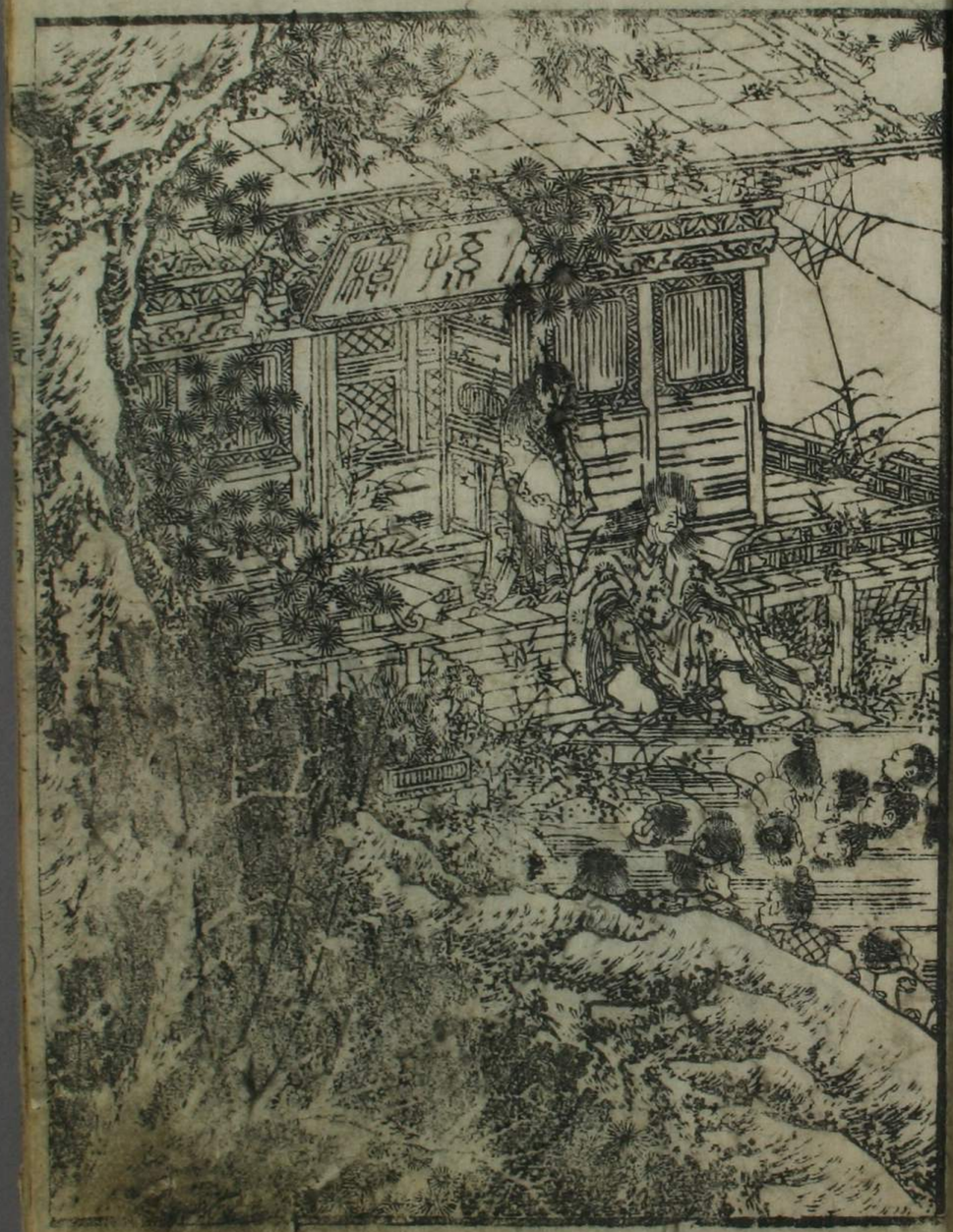
ふ峯ふくるれく昼のごくいと明くなる隨ふ頭を廻らして彼此を
見えくれば前面ふ一坐の古廟ありるりうち仰ぎてこれをえるる柱斜
に蠱蔭簷傾ひて寄生高く。石像の狛狗傾き倒れて苔蒸さん
とする雛獅のごく。木偶の隨身采を剥て釜より生るる餓鬼の似く
懸奠もあしく鼻の糞ふ塗れ。鶏尾いさぐふ蜘網ふ纏る僅る金字
の扁額の三月影ふ燻きて天孫廟と字ーられば鶴を忽地ふ刃と起て。
ほうちく糸りつ原来この神社ハ豫て笑く天孫廟なりりり寔ふ
つぶ國の宗廟ふまーはせども逆臣妖賊が為ふ國家敗れく久ーく
四時の祭祀を闕ばいといくう荒れ果て狐狸の棲となりるる春平
の付なりせば一トとびいとふべりしまつぐ同胞を少くより國難る免ぐおさ
が極てもとまくぎりる乾ふ今ゆくりなく宗廟を拜しまること幸ふ

とひとりごちつゝ草紙を石濶を掬びくゝめて清め壊れこゝ好く階ふ
登りて再拝して念じくゝく世ハくゝや澆季ふ及ぶといへども神威今ハ不
ゆるゝ。微臣が忠孝の志を憐こゝひて母の仇人阿公が隠宅へ導たく
風志を遂さしめ給へ。志うぶ王子を恙なくとりもりて為朝王女の素
懐を果し。曚雲を討滅して廓れ〜國ハ興るべし。仰くところハ神明の
擁護まよれと。身を平伏して念ずるゆ半晌ばかり。母やくゝ頭を擡
不知紫内の山中ハ通胃素めぐらんより。神殿ふ一下拔さ。あくゝ翌
つとめて足〜谷蔭の草舎を索へこゝ立めぐり。廻て扉ことを
かけくゝ。披たく内へ入らんとすれふ柱傾たれがあや力ハ究めて引け
ども開かず。せんなくなられば簪下にせと白鶴ふ童子がふへさ椎子と
とり出て。これを嚙ふ餓られば味いふべうもあらぬ。ろ〜ふかる艱苦ふも

忍ひ難く身ふ恙なくして。この山へとく来よしと思ふ懐愛さふ
瞻ふる空ハ雨雲の天に満ち月の燈燭ハ滅され猛ふ闇夜ふ
ゆりふかり。浩処ふ前面より蕉火燬ふりてふし此方をさして来れりの
ふり鶴ハ遠ふこれを見て人跡絶たれ山中ふ小夜深て人影寂ひ来ふ
こそ思ふる絲悲しかる國の宗廟天孫氏の宮社も山賊の寨とあり
けん。潛びく物の音悪を見んやと彼此を見久れふ神殿の扉開されば
身を隠さへ隈もなし。さるゆうさふ思ひつゝ烏夜ふも光る扁額と
うち向上へく弓弦を銜破れ簡子ふ足踏うけて鈴の緒ふ携りはい
榻の上ふ攀登りて額の陰ふ躲れてゝり。さる程ふ続松の光りちか
うるゝに荒男ふ五六十人皂ハ衣ふ皂ハ頭巾と戴き長ハ刀を跨うれ。おの〜左ふ
木皮の脚絆して長ハ刀を跨うれ。おの〜左ふ火を抗て右ふ

人の首を引提古廟のほとりに繋ひあるを聴て続まとうち累て鼎中
としられハ天結髪くりと暗かれど其火の光りに八方を照らして毛の
穴までも見えわたりし当下夥の荒男ホハ二帯ホ居ながれて一人
を出して社にある巨木の虚をさし覗き君ハ渡御ましまし入りや疾て仰を
奉りさんば祭の贄を持来せり出させ給へと啓されバ虚の中より恚
志らく年の齢ハ七八十ぢうりなる老女の雪より白き髪を乱さくるつかし
大和錦の袿して緋の袴の裾をながくひきし八才ばかりなる男の童の手を
携て徐々に歩み出上座ホ推なほりて半朽頽たる階の上へ童子をとどめ
居させて身ハ中殿ホ尻をかけて左右をうち見やりしかバ面魂物凄じきまで
ホいと逞し。鶴ハ扁額の間より是を見て且怪み且歎びとの男の童の面
影ハ郷简ホ谷蔭なる草舎ホて見れホ稚子と覚りしかバかたがたど亦

彼老媼ハ紛ふべくもあらぬ母の仇人阿公なりけり。そもいかにかとうち騒ぐ胸
を鎮めて見るに其ほかれバ童子ハ阿公が奪ひ去る王子ぞかし。草舎
にて見しにいやましていと寵愛するものの名。王子ハきましなりけれも又面
忘れずまれバ。かれ隠宅より来りながら外さしくも思ひで立る道しりそ
悔しかれ思ふるに今夜をしらずして母の仇人阿公副眼下に出来る
るぞ。かかる同胞の誠心を。天孫氏の憐みまして神霊其ホ償れ給へり。譬ぞ
一箭ホ射て殺して。王子ホ徽臣が孤忠を訟よろづ自の為ホ志なきハあらずかし。
王女為朝の志ぞ。言祥に告まつるさぬ忠孝てる全うせんとさへとて弓箭
うち剣ひ。亭固んとして亦步ふ步ら阿公が撃るとも目にあまる夥討の
野伏ホそらうホせんとれ立地に討死せバ誰か王子まつる忠孝をなるかの
のあるべき加旃。かかる才ころにあふびてられのこ仇人を撃りとゞめさるべきそな



天孫廟ニ
阿公
首級を

あわなくやふらぬ前に投ずる器とりてせどとん。古人の金言既に化人の隠宅を探りて。その進退さえ定れば。袋ゐ物をわくが如しと早く左をつれつゝ練りて。音もせび闕窺ち。阿公いちれば左に右見ぐゝし。謀て分付る贄の数不足ゝ准彼しこれ狄今胥の着到誰くなるぞと問ぐ衆皆所を低き。い國場の東紀松川の南吉。与佐の堤造安里の紅衛。津嘉山の平覇。仲井間の空壽。古波蔵乃安栄をんじめとして着到をべて六十一人。命ぜられる生首ゝつゞ。時日次たゞとりて来れり。受おるゆえ。おのく首級の所髻と繩で。階の下ゆゆぶれば。阿公ハ頭りてかゝとしろ数へ果。分付る首級の数ハ九く八十一なれに。一級足ぎれへいるゆゑや。さりとていひゞひし。陰裏ハりてどるゆゆ高。虚氣くよとらひ懲らせば。ゝるりとゝもゆ頭ゝ撫き。

俺們四五日已前より。真和志の属村いさゝゝ長川のほとりまで毎夜ゆ徘徊ちゝれども。曚雲処くゆ関を居て。人の夜行を留ハ。始ゆくりのハ稀ゆゝて。八十一の数ゝ満ゝ。僅に一級缺ゝ。懈ゝゆゝ。今一両日とゆゝ。その数百ゝも満ゝゝ。許容われ已と啓をれば。王子ハいとゝ大人ちゆゝ。やよ阿公九ゝ世代知せんとて。三年ゆ及ぶ艱難苦労。その志ハ喜しられど。罪なゝれの首ゝ刎ゝ。祖神をゆゝるとも。これをよく受ゝらんや。今夜のゆゆハ止ねゝし。宜べ頭を掉。倍歳ゝること代仰ゝるゆ。伊くきく日の本ゆハ野猪の所七十ゆまり代贄とし。ふる神ゝゆめり。亦武者徘徊ゝる猛者ゝ國くの神社へ首級を向ゝりのもめり。今ゝの贄ゆそれゆ。ゝし人参果の神事と名ばくされば往古天孫氏跡をゝの山ゆ垂ゝるゆ。ひゝゝ載ハ一万七千七百九十餘年。國王ハ王子をかゞくて。廿六代の今ゆ當り

傳信録云城山ハ
天嶽ノ任使
伯孫ハ云板屋一
區ノ名今
[illegible]
[illegible]
即チ[illegible]
[illegible]

妖賊ハ世ニ陜クレ山林ニ脱ル人ハ君ヲ忘レテ天孫氏ノ正統ハ絶テ
[illegible]この時君臣心ヲあハシテ祈ル感應ヲ[illegible]ん[illegible]やこの城山ハ天孫氏の
威霊ハ表シテ一名ヲ靈嶽ト唱ル[illegible]ヒわいとれバいとゝもかしこし曩ニ
日本の浪人源八郎為朝ハ物狂シ[illegible]寧王女ヲ賺ス[illegible]ク[illegible]て妻ヲ取リ
威勢ヲ權テ利勇ヲ殺シ王子ヲ[illegible]人[illegible]ひ[illegible]ンと世ヲ[illegible]ル扉ヲ脱れて
二年の[illegible]ハ玉體恙なくハ[illegible]ハ祖神の衛ハ[illegible]ハ彼
為朝ハ貪れ[illegible]ハ飽ヲ曚雲ヲ[illegible]滅シ中山南北の三省[illegible]く有ん
とて却嶋袋ヲ焼殺され王女もその日に[illegible]ハ猪武者の尾ヲ著て
角舞せ[illegible]松寿ガ徒こゝ[illegible]ハ天の四訓ヲ[illegible]正子の
威福ヲ[illegible]國恩ヲおりし恥ヲ[illegible]ハ草命の時ヲ悲こ山林ヲ脱れて
招[illegible]もかくのごとく王子ハ従ひなれば曚雲ヲ滅さんと今より三年ニ

[illegible]ハ仏ヲ[illegible]と慰れバうち点ル鞭ヲ[illegible]ても只
痛シ[illegible]ハ姉王女大里山ヲて[illegible]ふと[illegible]く[illegible]ハ世の中形ヲし又為朝ヲ
日本ハ稀なる勇将忠ヲ義ヲ[illegible]と風ヲ[illegible]しかゝざりせば[illegible]その
下風ヲ[illegible]松寿ガ亀いとて曚雲ガ類ヲ[illegible]べ[illegible]これ[illegible]も今ハ残ヲ[illegible]く
討死シ[illegible]ハ声ヲ激シ幼稚ヲ
ヲ[illegible]ハ[illegible]ハ王女為朝ヲ[illegible]ハ足ヲ[illegible]位
ヲ爭ヲて戦セ[illegible]ト日本ハ漢ハ[illegible]ハ世ヲ[illegible]ハ這奴ハ[illegible]く
曚雲ハ[illegible]ハ疫病の神ヲ[illegible]て仇ヲ[illegible]ヲ和俗の常言ハ異
[illegible]ハ[illegible]ハ宜ヲ[illegible]ハ嗚乎ハ[illegible]ハ賺シ[illegible]ハ赤裂ハ[illegible]
對ハ汝ハ其処ハ[illegible]ハ跪ハ[illegible]ハ足ヲ[illegible]ハ贅ガ地ヲ生ん
闘鏤樹谷の隠宅ヲ[illegible]ハ処ハ寄出路ヲ掘ラし抜ハ宮社ハ治ること

閑錄曰ハ大明一統志巻の八十九琉球国土産の條下ニ云閑錄樹ハ橘ニ似テ葉密ニ花ハ李邦の人ことゝ云ハ誤ル

ふ百日に満ざれば結願の贄をとゝ勿ふ。せんとゝ思ひ〳〵ふ。その数足〳〵ぬれば。ゆよかゝるとて快〳〵ぶ。ちかくこゝろ経更闌ゆん。安〳〵罷りて今一人が首と刎く持くれ。そのゝちいつ等闌ゆんぶ。汝ホが首と刎く贄の数こゝ元ぞゝくゆれね。といそぐじゝられば。阿と惑つ。准侯の続委ゝり出て。無火ゆさしゝ。ゝるれ先へと群ざゝて南の山路へ走る。折ゝふ驟雨颯と降てゝぶ。おどろくと雷鳴ゆ電間ゆゝして。張おつる谷川の音。阿修羅の闘の声。ゆゝとゝくど物ともせず。阿公ハ驀〳〵。王子と抱て階ゆ立在。彼野伏ホが降り来ると。今ゝと待ゆゝし。誘ハ目今野伏ホが走り去ると。ゆゝ〳〵欲び。撃べ仇ハ阿公のこゝろの隙ゆ宿志ハ遂ぶハ何の時ゝゝ期とゝ思ひ定めて袖ゆ揚。花下へと走りしが。無火ハゝゝ降る雨ゆ悉ゝち滅ぶて。善悪もゝゝね烏夜となるゝね。

阿公を撃ゆんとて。王子ゝ傷けゆれば。忠ゝふ又孝なゝゝぶ。ゝゝ西嶽て月も出よ。とゝふゆハ似ゝ晴れゝり。暗ゝよ迷ゝ壮士が。かゝゝゝ放て焼刀の鞘を握てゝゝゝゝ。

第六十三回

第を救ひ祖を認ひ落月弓
因を推し果を談ぶ解手刀

小雲妄時〳〵て雨歇ゝれば。累ゝの雲の薄〳〵に月こそ出ぬ。あゝゝるゝと。おぶえ〳〵かば。誘ハ竊ゝ欲びて野伏ホが立ゝゝば。後悔ゝゝゝゝちぐ〳〵し。名告ゝけて撃ぐゝ。ゝゝひ定ゝ折〳〵もあれ。忽地前面の尾崎より。蕉火の光り。二ッ三ッ閃れ出ると。ゝゝ動揺め〳〵声の騒〳〵。二人の野伏ホが。ゝゝの旅客を捉つゝを取り。足をゝれ飛ゝ宙ゝ引立て喘〳〵走り。ゝれハ阿公ハ。王子を怕〳〵て抱〳〵して階の板を半ゝり〳〵ゝ。ゝれゝ者ハ

律嘉山の平覇。仲井間の宜壽。古波蔵の安策。ふびや時をうつさず
拔群の働に賞をぞ〻く。這奴何処より生拘まつると問ば之人り申
さもふ彼旅客を礮と引さて昏ぐれ人跡絶〻れ山中獲あるぞうハ
ゑハざりしが。仰黙止ぐされば衆皆八方へ部しつ。そぶ中ふ吾倚こ人この山
の尾のあるさなれ穂屋のほとりを徘徊されば。内ふ鼾の音きこゆ。これ
うとぐうり火ゑ抗てさ。訝けがこの壯佼前後ちふびふ熟睡きれど。矢
庭ふ外面へ引攝せ。首を刎んとぞひ〻ふ。彩ふふ稀なる獲なり。活なぐら
こそ拔てゆゑ時やうつると。索をも被ぞ賺て引攝てまわり。といふ間ふ
壯佼を捕ま。臂をまれ久さんとて。小膝を衝くたまくされども。鳥の諸
羽を縫れ〻ぐく。押縮やられ〻ぶ。嘘のこゑせんをぐみ。阿公ハこれ式
生をこて黒毋なれ歯甚をあ〻ふしてうち笑ひ。その数缺るをふの

贊ふ神慮ももぞつなりし。忽地満足一つるゆ念願成就疑ひみし
まつそやつぐ面をこせよといくば蕉火さし著る。火光ふ額の背より。鶴を
闕窺て大ゑ驚れおりひきやつぐ生拘れ。あくまく命の
終〻ふんとふ兄をこ〻にといくぐえふ。いぐで再びきぐ。とこれば之くハ朽ぬ
いくぐ生をぬべれと。密ふ弓箭をりみはし且く隙を窺ひけり。當下
阿公をちう〻進こそ壯佼と面式あ〻してりつともに。うち驚てつ阿公を亦
呵〻〻と冷笑ひ。汝ハ曩ふ誅罰せ〻れ。毛國掛が二男亀なるぞや。と問せも
あくを歯を切り。汝いまぐこれを忘れぞ。これ又いくぐう汝を忘れん去年長川
ふ軍敗ぬ。その日より。存命べく。もそ〻ひど。母の仇人を狙撃んとおりふ
ぐりに引も死を兄弟彼此ふ躍ひつ。仇人の命長れと禱ふ宿志を
遂んが為験をあるふ似くれども。汝がちくにありともちふぐ。ふやをじめて

登る山の峻しみいとく疲れ夜興引く菰屋よ熟睡せ一。不意を知れて生拘られ怨を泉下み迷ちて天の命なりかる兄弟ひとん宿りにあふぶられ睡るとも兄ハそんの別れ日数ハ狂孫程どこに身が知る。とても。ちふでや索まふらん。仇人の所在をつぶ兄ゐ告まほ一。ちふせまほ。あーれ仏ハりとうくに過世いうなる悪報みや。つぶ同胞ハ天神地祇よも憎れけん。あるじ世界の月も日も。かくまで照ふしまろね欲。と声仏ふるし眼を睜り。蹉跎ていいくそたび走りかくらんとそれが推居る。こ人を柳よ被られて泥よ塗るく。両後の場雲脚近くまどそれぬ恨の眦血をこぶ腸を断孝子の怨言やろけてうち咳れ。あるじのや。置一やこの阿公ハ王子の妳母世とて財とて。君りろとともに寡くそとも老くりとも。汝ホが公刀薙皮一き切り知んや。とてもかくても屠見ぶ羊。みぶう忠人をさせんより生乃根断て知ちせよ。といひつ左右紙見えれがらけまろると意もあへさ平轟ぶ引抜く刀の光りみやよまて。ちびしまるびそと王子うそ為ふ呼び禁あ嘯阿公毛国掛ハ国の忠臣。その子ども赤をめくいくも。雑せんハ不便なり。命助けて知ちせよと孝子を憐む怜悧さんハ才童よ稀なる君命を耳ふもうけ。氣ちを変毛国掛を右臣なりとん何人が告まりん世忠臣ホもあれ逆臣ホもあれ。彼ハ罪ありて誅せられ。その子どもらハ君よ慈せ為ち知ふ媚涙ひ剰阿公ハ母の仇人ホんどなれとといふて人を惑を癖者なれバ放しがと彼も是もこる王子のちん為ふ。ーれとてかくいろんや。人とて多られ今霄の贄ホ亀を獲ちるいふーへの亀のト部ホませ吉瑞幼稚くとも君ハ君。ちしたて紙宜ふるりのどもみどと猶豫せ一。首ハ剣よと下知それハ脱ちかるの下に立。亀が肘ハ左右より引捕へく雑

なわせば平覇は背後ゐ立鏡の目さへ突出て氷の刃玉閃りと引てあり
あぐれば古廟の廂を強音〜と平覇が腋壺兵と射る滋四五すあくられて
叫びもあへず仆るる。これを駭く安桀が二の箭を吭射抜れて仰さまに
ふ〜輾べば亀を駭くと刃を反りて敵の刀を撥とりて宜毒の音と
うちちゃせば落る半弓投てて刃を跳らしつ抜下るる吐嗟と驚き
阿公より亀は不思議ゐ兄の〜ゐ解れて必死を救ひ〜るの熟図ゐ
逞ゆく。ひらけとどろきに兄弟左右ゐ立てられて阿公を央ゐ囲ん
勇る声をあり立名告らばとも亀が兄弟なれいまぐ〜ゐ高れば
そも谷蔭なる汝が憑宅ゐ宿りて求ゐる留ち世童がらけ〜稀ぐ。
王子なりとゐらひもかけぐ意ゐ宿りを求めるゐて亦立ゐる道ゐ迷ひ
く。ゆゑ好くも天孫氏の御廟を拜〜ゐ明るを俟折ゐ黙伏

ホが緊ひ縛るゐのゆゑ我ちゐん為ゐ。扁額の背ゐかくれて一五一十ゐ
闕窺れば。ちく〜に名告ぐ誇べうじが。汝ハ夷勢ゐれハ一人便宜なく稀バ
黙止せ〜に。その徒ハ走去く。仮ゐ似ゐれども。雨降ちぐでいと暗。王子ゐ
傷けなる。ゐりやゐんとゐゆゑひて。ちゐふぐ身が必死を救ふ。ゐ子是天の
祐なるところ。迚ゐもいざ脱をべれ。母の仇人とそ名告れ。名告れ。と同胞が
いひ合て高く競ひ〜れば。阿公駭ぐ。ゐ〜ばとていろ〜りの哉
王子ゐ傷けなゐ。ビとて猶豫せ〜ゐ虚言ゐ〜ん汝ホ事ぞ。天孫氏
の神裔とそるこちゐるこちゐ。ゐ〜ば出処不定の為朝ゐ荷擔〜て王子が逐
失ひちゐ〜んや。これハ元ホ国の忠臣。汝ホが母をちゐば。仇人と奥なと嫌
据やゐ。といろせもあへず。誇ハ腰ゐ短刀を抜ちゐ〜て突出。いゐ阿公
この刃をば認まるなゐん。汝いゐ年。南風原の城の濠門を滑り生〜脱

さるとハ。又これに打かけられ銑視ハ紛ふことなれ母の像見の鮮くも刀鞘ハ
黄金の鍔と亀富蔵河のほとりにて母新垣が殺れたりし亡骸これぞ
腹なる児とこの短刀の失られバ。これにまぎれ澄据なし。汝ハ母の仇人
なることを既に朧雲が口より洩らせバ。大かたハさるといへども虚実を定めん
ために奪ひとれし母の刀を打かけられて疑念をたちまち実に汝が自
業自得。かくても吟びあふそかや。と罵れバ。亀も亦引提し血刀拿なほし
老賊何の忠かあらん。その身の罪を脱ん為に幼君をとりまいり山林に離れ
狗黨を集め世を誣人を欺く痴者。今立地にこれを討ずん。誰が忠孝の
人といふべき。王子が遁て刃を受よといふ声さへにかひぐしく撃バ斬らんと
よせあふせり阿公ハ證據をとられて脱んとするに言語なく面色赧く成
蒼なり。歯もあれ歯茎切りて。脱あがりされ額髪の針のおそくなれ汝

そふきぬに振揚てかけまくる眼の光り星のごとく。炎のごとく息を吻か
ハ何ぞ匿ひべき。その短刀を奪ん為に富蔵河のほとりにて孕婦を刺殺し
走り去りけりのハ我なり。返撃にせられそと名告かけつ懐剣を閃り
と抜て打かかるを。受とめ鍔が受とむる刃の光りのうちにも亀が右手より
謡の太刀を拂ひ退けつきりむすぶ老女に似げなき手練の太刀そら右
を拄つ。左を撃つ。いとも烈しく戦へバ。王子ハ遽て堦の上より走りおりつつ
彼此と立繞れどもせんすべなく。連洏る声を揚諸亀と共にふたたびし
また阿公もやく逃よかし。いと危しとさけぶめる人バ。側杖撃れまふなと頻
久る阿公より猛く勇める諸亀も。只に捋にハ撃ちする。刃の隙より
身足を踏滑して燃さきれ蕉火一度に蹈滅せバ。忽地舊の鳥夜となりつ
撃太刀さらに定かならバ。只ぐに氣息を候ふて丁と撃てハ踏ひ引赤

白刃は空を切りしかバ目前へ突出せし刀尖に忍びも鼻を皺めて身を返さじと只いさゞかに追ひ繞り須臾時をうつせしが忽地叫苦と魂消る声せしが二人は撃留たりといへど正しく阿公なりきては身は驚れし欤ちやつかが兄を痍を負すると心慌て仇人の声をしるべに礑と砍る太刀風の雲さへ吹や拂ひけんあらはれ出る夜半の月隈なき光とかにもれば无慙や阿公は王子を仰さまに引よせて胸前ぐさと刺ちがふ今鶴亀が撃かけられし刃に左右の肩を砍られて流るゝ鮮血は泉の如し兄弟もその形勢に驚き呆れて目をめじ暗れに迷ひてや阿公は王子を殺しまゐりこは浅ましかりける今こゝに罪いと重き弑逆の怨みさする君の仇天罰おもひしらせんと左右より赤ふりあぐる刃をえあげてやよやまてく。二人の孫よ鶴亀よ。祖母が今般の懺悔ありきゝがく息を継せよと

いへば鶴亀冷笑ひ。老耄て妄気さる欤かくても吾們を欺く欤孫と喚るゝおぼえはあらねどいへば阿公莞爾とうち笑て。しか疑ふは理りぞ。なんぢらより汝等に解るべうもあらじが孫よ祖母よと名告るが継母の仇なりとも。かくまで猛く撃れんや。今こそあかさん汝等が素生耳引立てよくも聴ねかし。汝が父母ありとせし人は勝連の親方。法司從一品阿高と喚れて国家に由緒ある縉紳なりしが。犯せる罪ありて鬼界へ流さるその頃なんぢが母は汝が枝の姫松母りしとも住なりし勝連を追放せられ憂苦に堪ず母は身まかり。汝が父ひとりかに三年経て。せめて配所へ赴んと父に仕へとぞいひしかち泊の津より硫黄船に便りをもとめて彼処へ渡り父を索ねば悲しかるかなその春病て世を去ぬと聞くに吾も絶果て鬼界が島に渡へよれども身へよるべなき繋ね船さすれど雄々しき性なれば。かくまで

まさるをそなひ出ふ。薩摩浮へ推流り何よまれ一藝を習ひおぼえて[illegible]へ
久。ゆくゆく用らるることもやと謄太くも思ひ定めて大日本へ渡海しの[illegible]
國大伯ふ二年のあるりさそくふひて。唯一神道の奥義をうづ孫便よはき
く肥後ふ越た阿蘇の神社へ宗詣してくよ且く旅寝せしろ彼明神
のゆふの霄宮ふ。弱官よかくふひよくれいるゆへわふね稲紙の褄を枕
の化する契よ羞て名告ふぼ各も志ふぼ。あひえんすでの紀念とて。郎ハ
差副の短刀をそぐまくこりてこれよ贈り。吾ハ亦懐うの巻油と取生く。
郎ふ贈りて果敢なくも起こうれぜ。次の日に稀よ笑えど故郷の風の便りハ
赦免の沙汰商船よ便船して。ゆがてぞ流る琉球國。官府ふ学えなれど。
つぐ身ハさふふしなた父ふ罪赦されて。本領のこがっ北谷の間切を返し場
ふり。大國の神道を受伝人恵ものとて。託女の長ふなされしかば。北谷の

女王と称られ夥の託女よ冊れ按司よもまた分の富貴に父ふ所名を雪ぐ
喜しさ楽忽地良ちの本ひとりくバ恥しや。日本の人と一下夜さの契り忽地
有身て月をかさねる身の悩ハものぶもゆるものげれど。とのゆりしせふ
ゆえなバ神よつうつれ掟ふ悖くと官家の崇服れぐくて人ちとね胸を
苦しめ行後ぶ女ハ臨月よ人ハ生ぐど産おとせ玉を欺く女子といと
不便ハ思ふ人ども養ん女うめふぎれバ。ある夜密よ抱きて北谷の属村
なる濱川の里よ棄。日本の郎ふ贈りうる。九す五分の短刀と袷縫の紋
よ結そえて。ふつくくハ別れぐも涙よ踏ハ去りめくど。その翌も又翌去日
も。そのこの空のうち謄め。何処の人ふ拾れる秋の中犬ふ食れぬと
思ひうつ送る日ふ夥の年ハ経れども忘れぐこれハ女児ぐのえ[illegible]
託女の長夫りぐきりのゆふぐ不遥よくふちハ日本うる郎へうる操ぐ

と思ひて壯を他ゐること。よる年なことに生れ出し。大膳いよ〻愚かくりて貪る心いとぬる〻。慾ゐ惑ひて中婦君と利勇ホが奸討よかくふられ。賢明の女えまし〻はせし。王女と亡ひなまくふんとしてるゐ。ふたりに毛國押よ着破〻れて北谷を追れ〻ぶ。利勇ゐ扶持ゐようして。都のほとりに潜びてとり。ゐほとりずまふ中婦君の奸悪を翼んとて。利勇ホと謀〻あひ。民間ゐる赤子を竊て中婦君ゐ産まひ。といはせんゐ為ゐ考のびくゐ。彼此を徘徊し。富荒河の辺なる郊原ホ病卧を女房ゐ臨月なるを。猪〻。それゐ子どもを欺て。某買へとてほとりを遠離ゐ。孕婦ゐ腹を引裂きて腹ゐる赤子を引出ふ。婦ゐ今敗よいとちくこと。短刀こそ代りのどもゐ名をきるよとゐとなりもせそ送〻あ〻べた物ゐ。とこれき人ホ奪ひ去り。件の赤子を利勇よ遍ふ〻て。後よ彼短刀とつ〻〻えれば。えゐも忘れぬ。三十九年さ死つ秋。葉〻女児ゐ襁褓の紐へ結び。ゐそ送〻る。日本の郎ゐ像見の一口。紛ゐ。ゐうなれ鞠の話。亀原来ハつゐまに殺〻れ。孕婦ハ藁の上より。捨〻女児ホ。ゐりゐれゐり。さハ洩ゐれ。ホ行ゐそゐり。を百遍悔ひ。千遍悼めど。ゐせ〻悪業ゐりもかくら。を隠慝の悪報ハ悲ゐ却。強慾を。倍ゐりゐ。ゐ〻ちとゐりしゐ。ゐ〻び三ゐびちひ人ゐ。女児ゐ良人とそ定ゐ。なゐ〻ふ。ゐ〻。赤子ハゐ孫ゐ。此りの世子よ立ゐれ。琉球王とゐんよ。女児ゐ非業の死ゐ代て。赤ゐ〻ゐなれ洪福ゐり。と。怨念をそれゐ未憑ゐく。そのゐハゐ〻〻隠ゐて。孫ゐ成長をまゐ。ゐどホ。曙雲ゐ幻術ゐく。俄ゐふ國王中婦君も。ゐ〻じ日ホ薨れ。ゐ人ハ。利勇ハ王子ゐ代衛傳れ。南風原の城へ楯籠ゐ。牛角の勢ひを張ゐりゐ。ゐ〻ゐ〻ゐ冠を。ゐる聲ゐ。ゐれども。ゐ孫ハ王子新主とゐる敬せゐれ。既ホ六年の月も

日ゝ。つゞまにこれをちり斉れば。牙ゝよる手ハ惜くゞ。只孫ゞ人とゝ
を。俟べ又あやゝくに内乱ゝよりて大臣利勇ハ為朝よ殺れ一日ゝ。汝
同胞これを逐ゝて。毋新垣ゞ仇人と呼びうけ。前中城按司毛國男ゞ二人
の子ども。鶴亀と名告りしとれよ。ふゝうの孫とつゞ女壻の名字をとゞめ
てある悔しさ。遽莫とゝの王子ハ鶴亀ゝゞ。多ゝ曙雲亡びて孫王子ゞ。
國を普く御ゝふ至ゝゞ。二人の兄ハ。従一品國舅國相の高位高官ゝ。
極んもいと易し。説ゝくさでゝ。事急なれハ告ふよしなく。
その短刀と銑視ふ。寇を外して打うけしハ。環めのせもあゝん日に。骨肉の
真を告王子の佐よなゝんさと。ゆゝれゝ方便ハ曙ゝふぬ支堂鄉よ平覇
安栄ゝゞ。不思議ふ亀を生拘ゝれゝゞ。そゞゝゝ怪懐愛ゝ。つゞ胸中を
ゝゝせんとゝゝひなゞらゝひよるさゞのゝれまゝに。その剛臆を試んとゝ。

首を刎よと下知せしゝ。實言とゝくハ稚児の王子ハこれるふ忍びうゝ孫ゝ。毛
國男ハ國の忠臣。その子どもらといゞて誅せん命を助よと禁めゝる。手オ
あハいとも甚せし怜悧さ。自然と憐む兄ゝの情ハ誣よ誣ゞゝ。白刃の下
よありうゞらゝれを罵る亀ゞ勇敢額の間ふ牙を躱して。ゝ殺し話
ゞ智畧。これゝふいまゞ数ゝふゞ。親の仇人を殺んとて。百折の艱苦ゝ厭
はゞ。あるとゝれハ王女ふ供奉して。塵雲に生拘ゝれ。利勇ゞ為ふ擒となれ
ゞも。忠孝の志移ふゞ。天の祐を得ゝれバ。あゝ。長門の敗軍よ。汝ホ兄ゝのこ
殺れゞ。今ホこゝにゝれをえて。毋の仇人とうせめゝ。勇士の廣言道理
ふ稱ふその健氣さよ。自の好曲を羞ゝゞ。邪念の角も折れ。孫ゝ導く
浅瀬川。ふゝゝ忍ひよ濁りゝとゞめて。曙ゝる天罰ハ尚寧王の徴ゝぶねも。
王子と称して世を欺き。王女為朝の討死ゝ。身の幸と欲びて。その残業と

羽夫はまむしの大なるものゝ羽夫の説は後の巻にみえたり

悴り聚へ祭の贄に假託て人を殺して賊をなし太山の奥の深山樹の根ぶかれしものが強悪を細溪川に影うつして清くながらふ語亀が忠恭の思ひ比べは今さら悔しく恥しく。せめて罪悪を滅せんために天孫氏の廟の前にて王子といつかれ孫を殺し。手長なる孫語亀に搆まれんと思ひ定められし火宅踏消して暗れ紛れ。此ちりしとおもふざるや疑はしくは影ある月を燭にこれを見よ。まづ生血と王子の鮮血と。ひとつにまるりて骨肉の真ちかしきぬかに。さら羽夫にもまじし毒悪の祖母が懺悔を聞て首を刎く忠孝の名を揚家を興せし三人の孫が三人ながら。いづれ疎におりかが孫ど。まづ手に手を孚るときなぐりのを八しやまで可愛さあまれど。此ことといひはあらさで刺殺せし老が拳を離れいづこに刃やあてん。思ひ定めぞ目にあまる涙を甲夜の

驟雨より。ふり降そゝげど身の錆を洗ひ流さんよしもなし。女児を殺し又孫を殺して孫に撃するも。因果觀面脱れぬ應報など首を刎ざれ。といひ激せども身はよろれ息の下する物がたりに語亀ちがく嘆息し。まづ外戚の祖母にて。とてもかくもいふにいかで身をあてらるべき。善悪邪正はさる人の心からとぞ聖も人ども。まづ同胞は忠孝に男ざましひを磨れおげても。芸あれさへもし道もなく母の仇人と宗寃ひし。仇人は母の又母あらず世をいつかりの儲君は亡父母の遺腹子現在身にあくんとなちでも脱れぬ國家の刑法族滅縁坐はいひとれがたし。そもいかなれはかくまで不幸なれや父の忠信母の貞節世にはあられど罪あるを討しし親を親ともしらね身は王子の稱を譖てあがらく父の名を下し。又語亀は外戚の祖母と撃がれても年来親を慕ひあまし。母の

為ふ罪をまとこと人作う天性う禍ふ亡し定ゞ亡し。やよ汝ものう亦兄死る
より外ものもゞ已。是まで なりと同胞う草を綑みけを占て刺錯んと志らし
う。阿公ハ慌〳〵と久りて声を激〳〵。愚なり。汚龜。ふく迫るも自殺
せることやハあれ。その短刀ハ日本なる。汝ホゞ祖父の賜今これをりて阿公を
殺ゞ則孫どもゞ。ものづから祖母を殺さふあらゞ。これつゞ夫の刃にかゝそ
殺ること志ふざれ殺。これハ外戚志ふも國賊。只一刀はして已とれハ汝ものう
忠もなく。又孝もうれ狼狽者。人情公道共ふ缺ふん。蓋の自殺ハ
どひさゞまり。祖母ゞ首を刎ざるやと物いふ毎ふ漬る鮮血をこんなよ忍
びれぞ。汚龜ハまふ含る刃を捨て法然と為を涙の雫霜と消るふも
又消ふれ身を卿ふぞ殺うゆ。いとゞひ已と阿公を膝をりはして
眼を睜て。汝ホこれを殺ゞ。て。痩平愈ふれをあり志も天亦これを許

さんや。その短刀を。と掻よ〳〵て刃を項ふ押あて。自刎んとふれ折ふ古廟
の内ふ声〳〵。老賊阿公自殺ハさせじ。鎮西八郎源為朝。こふあり。と名告
ふ人ハこゝ〳〵。と孫祖母向上れ古廟の門扉ハひらか〳〵為朝王女。
舞天丸ハ松壽紀平治をわそ立出ふ人ハ汚龜いとゞ面ゆげふ前ふ迎へく
再拜〳〵。去年長川の敗軍ふ大將殺ふれるひぬと志ひ定めて逆臓ふ
堪ぞ。ゆゝ〳〵も歎れ志ものし。王女りうとも恙う。志ひうけざる廟内ふ。
志し志ふとこと有がゝく。歎〳〵〳〵そのふと恭〳〵く啓とれハ為朝莞然と
うら笑ふそ。われ嶋袋ふそ必死を脱れ。そうふゞ王女ふ環會佳奇呂麻
人ふ伴れて。姑巴嶋ふ赴て。日本ふそ出生せ。嫡男舞天丸及心腹の亀
壹〳〵し。八町礫紀平治太夫ふ再會〳〵て。彼嶋ふ春をむ〳〵近ごろ
ふ帰り潛び。越乗山なる陶松壽ゞ。源宋と志ふゞて宿りを乞松壽ゞ

亡妻真鶴が。しゐ
亡妻真鶴が身後の負節を感佩して。次の日件の山を出祈願あり。
乃ち。ふくふ此山へ登りて天孫廟へ参詣し。主後こゝに通夜祈り。
風を凌んゐ。内より固く鎖しゝれば。人ありとも。ちとざるべしとて王子阿公
が進退諸亀同胞が為体。これを竊ゆ。これを廟宇規。因果の道理感
ぜれば。亦紀平治がいまはしかりさるによりて阿公が先非を悔る自殺
をゝむやよ紀平治願ふまゝして阿公が。外錯許をと宮人が紀平治
を階を下りて。まづ諸毒をうちまぐり。亦阿公をうちまぐりつゝ嘆息し
昔の花の姿ハうせて。彼も老ゝりゝれも。老ゝれが名告ゝをそ。その
人ありとハ知もゝ。いゝよ阿公諸毒もよゝ。ゆけ色。老女が今殺の懺
悔物ゝりにやひハゝれバゝれも亦四十餘年の非をぞ知る。阿蘇
明神の祭の霄宮ふ諸亀の鞘ゝる。九寸五分の短刀を假初ゝ贈り

ゝり。阿公が密夫を。かくいふ町礫なり。ゝゝとき
網銭ゝるハ世の常ゝ。ゝゝ定まる妻なゝゝ。於曽れ風流士
ゝふ徐ども。袖ふりゝゝ稲舟の。網ゝふ結ぶ化ー契りも。人目
いぶせく名告もあゝぞ。ゝれハ短刀。妹ハ巻軸。これ再會の紀念ゝ
ゝりかハしつゝ起ゝれ。家ふ帰りて。淫婦が。おゝ物と拔ゝれば。
琉球國の地圖ゝ。風俗俚言ふいゝるまで。事精細ゝ録ーたりゝ。
奇ゝるゝもありけりゝ。先祖ハ琉球の人なるよいゝ。父の場ゝりゝて
ゝゝれども。書もゝぶ。扨ハゝふぶ。彼淫婦ハ何人の。妖児なゝゝ
ゝゝ。と。ゝゝ僅ふ四五日経て。ゝゝ。ゝれ。
狭と人ゝも問れど。索めゝれど。索ゝぶ。一ト夜の契りと思ひ
ゝふハ代と。呼ゝ。ゝ妻と。ゝ。ゝ浪のゝゝなきまゝふ。

山居して猟夫となりし昔は八郎の曹司に値偶してけり。九国
管領たりし時に至りて近従に召おかれ二十八騎の第一と世の人も
ゆるされし真にこよなき面目也。かくて八郎の曹司は君父の御
とがめを放せし鶴をとり獲んとて海潜に琉球へ渡れしかば案内たる
ものなかりしに紀平治がありしかども年来彼処の地図を土君
の益になりし夜玖嶋彼郷導に倶しもし人は朋輩なるもらうしれ輒く鶴
を獲てゆりしなり。これ主の忠孝と神の憐みによれど時の
阿蘇山にて地図を贈りし淫婦が績なりといふ人あるもまたそれを詰捨る
縁しそこに言ひ出れば短刀の鞘を更に孫にとらせんとぞいふぞ
乱淫と秋津洲根に二人の妻。三人の孫が善悪邪正と身よりする
これをとりあはした縁しを白地に名告るも昔聞しと説きて

阿公を原来その夜の密夫はおん身なりしが。かゝる事に花も実もなき
老樹ども。ひとつ根によれ相生の。あの別のむじやすりそも。いかで面を
あはするべき。さるはあれ後の夫におの様は只足のこゝ後世をし曲れる木に
も花ぞ開く。僻るものも信あって。憐まれんと昔の好に。この世の暇
あれして孫がこゝろを安くしぬる人と掌を合すれば鶴亀も。稀てその
名を汐及びけれ。八郎按司の股肱の老党。八町礫の紀平治ぬしそてが
外戚の祖父なりしなどしらけなれ見象かねと名告るは親の泣よりあて
王女舜天丸陶松寿も。奇耦を感嘆したりける。

椿説弓張月残編巻之三畢